
朋友だより

コロナ禍のため、人間同士の緊密な対話・面談ができなくなっています。お互いに議論を交わし、最善の道を見出していくという民主主義の原点が機能しなくなる恐れが生まれています。今回は民主主義について考えて見ました。ご参考になれば幸甚です。

2020年6月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥長弘三



民主主義が問われている



コロナ禍は民主主義に対する 挑戦である

前号で、紹介した4月12日付東京新聞の社説は次の様に言います。

民主主義の国々を見回しても、移動制限や休業要請など、対策への不安や不満が出ています。政治決定過程の透明化や指導者による説明の在り方など課題も多い。新型コロナは、民主主義に突きつけられた挑戦状かもしれません。(中略) 民主主義国家では、政権が信頼されていなければ、対策の意義も国民には十分に理解されません。

この点を見事にクリアしているのが、ドイツのメルケル首相のテレビ演説です(3月13日)。

新型コロナウイルスにより、この国の私たちの生活は今、急激な変化にさらされています。日常性、社会生活、他者との共存についての私たちの常識が、これまでにない形で試練を受けています。(略)

開かれた民主主義のもとでは、政治において下される決定の透明性を確保し、説明を尽くすことが必要です。(略)

ですから、申し上げます。事態は深刻です。皆さんも深刻に捉えていただきたい。ドイツ統一、いや第二次世界大戦以来、我が国における社会全体の結束した行動が、ここまで試された試練はありませんでした。(略)

これらを実際に実行するのが私たちにとっていかに大変なことが私も承知しています。困難な時期であるからこそ、大切な人の側にいたいと願うものです。私たちにとって、相手を慈しむ行為は、身体的な距離の近さや触れ合いを伴うものです。しかし残念ながら現状ではその逆こそが正しい選択なのです。今は、距離を置くことが唯一、思いやりなのだということを本当に全員が理解しなければなりません。よかれと思って誰かを訪問したり、不要不急の旅行に出かけたりすることが、感染につながりかねない今、こうした行動は控えるべきです。(略)

我が国は民主主義国家です。私たちの活力の源は強制ではなく、知識の共有と参加です。現在直面しているのは、まさに歴史的課題であり、

結束してはじめて乗り越えていけるのです。(以下略)

聞く人達をその気にさせる見事な演説です。コロナ禍によって、私たちの日常生活は大きく破壊され、なおかつ人々がお互いに充分議論した上で、物事を決める民主主義の原点が機能しなくなっています。まさにコロナ禍は民主主義に対する挑戦です。

民主主義とは何かを改めて考える

まず、民主主義の原点である「民主」から見てみます。

「民主」とは、一国の主権は国民、人民にあることです。いわゆる主権在民です。

そして「民主主義」とは、人民が権力を所有し、権力を自ら行使する立場をいいます。基本的人権、自由権、平等権或いは多数決原理、法治主義などがその主たる属性であり、またその実現が要請されることとなります。(以上『広辞苑』(岩波書店)より)

以上の様に原点に立ち帰って民主主義を考えた場合、その国が「独立」していることが不可欠の要素であることに気がつきます。一国が独立しておらず、他国の従属国の立場にある場合、人民の権力を行使する上で、宗主国から干渉が入ることが避けられないからです。これでは人民が思う存分、自分達の権力を行使できないのは明らかです。

現在の日本は「独立」という面で、大きなハンディキャップを抱えています。日米安全保障条約のもと、政治、軍事、経済のいろいろな側面でアメリカの「従属下」に置かれています。

民主主義の徹底、国民主権の全面開花の上からは、日本の真の独立は避けて通るわけにはいきません。

日本の民主主義の現状

日本の民主主義の現状を理解する上で恰好な本があります。

孫崎享著『日本国の正体—「異国の眼」で

見た真実の歴史一』(毎日新聞出版、2019年9月発行)です。代表的なものを3例ほど紹介します。

1. 小泉八雲が看破した「同調圧力」の正体(同書 P.234~5)

出典:ラファゲイオ・ハーン著『神国日本』(平凡社 1976年)
日本の教育は見かけは西洋風でありながら、(中略)外見とは全く反対の方式に基づいて行われているのである。その目的は、個人を独立独歩の行動をできるように鍛えるのではなく、個人を共同的行為にむくように一つまり厳しい社会機構の中に個人が妥当な位置を占めるのに適するように一訓練することであった。

2. 「日本人は精神的奴隷」インド詩人の見解(同書 P.264~5)

出典:ラビンドラナート・タゴール著『日本紀行』(『タゴール著作集』第三文明社 1987年)

わたくしは日本において政府の民心整理と自由の刈り込みに全国民が服従するのを見た。政府が種々の教育機関を通して国民の思想を調整し、国民の感情をつくりあげ、国民が精神的方面に傾く徴候を示すときには油断なく疑惑の眼を光らせ、政府自身の仕方書に従って、ただ一定の形の塊りに完全に熔接するのに好都合なように、(真実のためでなく)狭い道を通して導いていくのを見た。国民はこのあまねくいきわたる精神的奴隷制度を快活と誇りをもってうけいれている。それは自分でも「国家」と称する力の機械になって、物欲のために他の機械と覇を競おうとの欲望からである。

3. 「軍国主義は武家政治の延長」と言える理由(同書 P.280~1)

出典:エドウィン・ライシャワー著『日本(過去と現在)』(時事通信社 1967年)

1920年代の民主主義的議会政治の政府が、往時の藩主も将軍も、あるいは天皇さえもなしえなかった大きな統制力を国民生活全般にわたって行使しえたのは、近代的報道伝達機関と政治・経済において近代的組織がもつ技術に負うものであった。普通教育の充実、新聞、ラジオの発達普及、そしていうまでもなく国民皆兵制度—これらのものによって、政権の座にあたったものは、以前には夢想だにできなかった大きな統制力を、国民の思想に行使しえたのである。

上記の記述は、外国人から見た日本人の精神構造を適格に見抜いていると思います。つまり、日本において未だ民主主義が成熟していないということです。

今回のコロナ禍をめぐる政府の対応を見て

いても、前述のドイツとは雲泥の差があります。私から見て現在の安倍政権の致命傷は、きちんと国民に向き合っていないことです。国民よりも自分達の私的利益の追求が優先になっています。現在、問題になっているコロナ禍にとまなう国民への資金の一律配布事業も政財界の闇に飲み込まれている感じです。

日本の民主主義をより成熟したものにする為に

コロナ禍の為、4月17日から中断していた「沖縄、辺野古工事再開」のニュースが流れました。これに対し、玉城デニー知事は次のように述べ、政府の対応を批判しています。

「6月7日投開票の県議選では、辺野古新基地建設に反対する候補が過半数を占め、改めて反対の民意は明確になった」(2020.6.13 付東京新聞)

この辺野古埋め立て問題をどのように考えたら良いのでしょうか。

日本国では「独立」が保障されていない為、国民主権が徹底できない現実が生じています。

何故、第二次世界大戦が終了して75年も経過しているのに、このような事態が生じているのでしょうか。米軍基地の存在を沖縄の問題、基地を抱えている地域の問題と考え、一人ひとりの国民が「自分のこと」と考えてこなかったからではないのでしょうか。

丁度、当初新型コロナウイルスの問題を「感染した不幸な人達及び医療従事者の人達の問題」ととらえ、「自分の問題」と考えていなかったのと同じです。

しかしその後、感染が広がり誰もが感染の危険性を「自分の問題」ととらえるようになり、マスク着用も確実に向上しました。

米軍基地の問題も、沖縄はじめ基地周辺の人達だけの問題ではなく、日本国の主権が侵されている、日本国民全体の問題と考えることが必要です。その為には、ある程度、想像力を働かせることが大切でしょう。

まさに、今回の新型コロナは日本の民主主義を考えるよい機会を与えてくれました。



